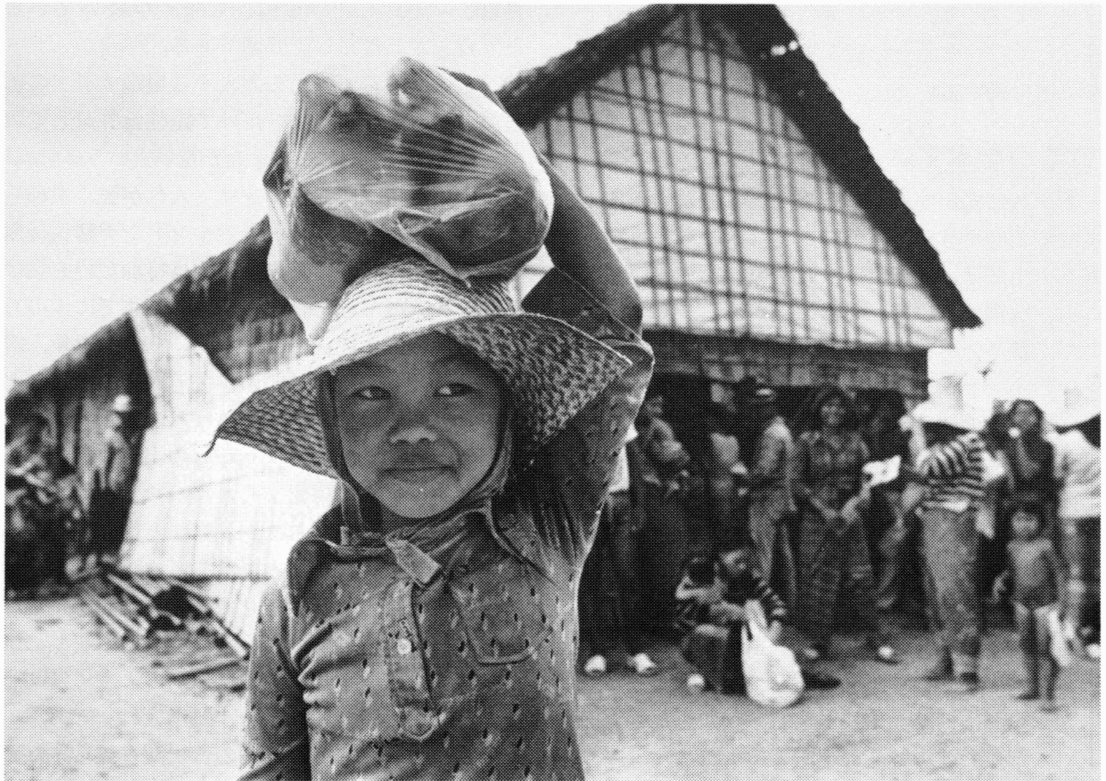


Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.72

試 行 錯 誤



補助給食をもらって(国境の難民村) / 毎日新聞社提供

目 次

インドシナ難民はどうなっているのか	2
カオイダン技術学校の意味するもの	6
タイ近況報告	7
<ラオス開発のための円卓会議> 西側の開発協力を	8
<カンブチアに関する NGO 会議> 今, われわれに何ができるか	9
手記 私のソマリア—1986年	10
保健衛生プログラムを引き渡す	13
JVCNEWS	14
ソマリアの日々——⑤	16

インドシナ難民はどうなっているのか

——難民の日常化の中で

インドシナ難民……ベトナム、ラオス、カンブチアから国外に逃れた人々。87年6月末現在、タイなど東南アジアの難民キャンプに約14万人。1975年以来、アメリカ、フランスなど世界の30カ国以上に定住していった人々の数100万人以上。そして今なお流出は続いている。

たいくつな本文に入る前に

ともすれば難民を人々の大集団としてとらえることになってしまうが、当然のことながら難民となった人々の中には、老若男女、政治家、軍人もいれば商人も、芸術家もいる。貧富の差もある。そして大半はごく普通の農民、庶民である。

75年のインドシナ3国の政変から11年余り、79年のカンブチアの政変そして難民流出から7年余りが過ぎた。近年、その激動の時期をかくぐって来た人々の体験が個人の物語として、手記やドキュメンタリー小説として表されてきた。それらは報道関係者による客観的な報告・聞き書きの類とは別の生々しい現実を伝えてくれる。

カンブチアのポル・ポト時代の苛酷な体験を描き、映画で有名になった『キリング・フィールド』、解放された祖国に幻滅しポート・ピープルとなった元ベトナム解放戦線の幹部の手記『ベトコン・メモワール』、ほとんど知られていないラオスの山岳民族の戦いと受難を描いた小説『メコンに死す』いずれも邦訳がある。

タイにとっての難民問題

タイ国内のカンブチア難民のキャンプとして代表的な存在であったカオイダンが、86年末にタイ政府の方針により閉鎖された。人々はサイトBという別の場所へ移されることになっている。しかし閉鎖は書類上のことで、87年8月現在も約2万1000人の人口の大半はキャンプ内にとどまっている。いったいなぜこのような措置がとられたのだろうか？

① カンブチアとラオスに国境を接するタイは、陸路流入するカンブチア難民、ラオス難民、海路漂着するベトナム難民を受入れてきた。その数は流入数が合計120万人近く、86年だけで1万3000人以上、

滞留数は87年5月末現在で約11万7000人となっており、インドシナ難民にとって最大の一時庇護国である。そして一時より数は減ったものの、今なお毎月600～1800人という規模で流入が続いていることはぬきさしならない問題である。

② タイに限らず難民の流入する東南アジア各国は、難民の一時滞在を認めるだけで定住は許可していない。経済的社会的にその余裕がないという事情がある。そこで先進諸国に難民の定住受け入れが強く求められている。79年にジュネーブでインドシナ難民援助国際会議が開かれ、以来先進諸国は特別な枠を設けて難民を受入れてきた。その結果これまでに100万人以上が第3国に定住していった。しかし近年、経済状態の悪化や欧米諸国での移民労働者の増加などのため、多数の難民を受入れ続けることが困難になっている。(表①参照)タイからの出国数が頭打ちとなり、キャンプに滞留する人々の数は減らず、難民にとっては柵に囲まれたキャンプの中で長期間不安な生活を強いられることになる。

③ 難民の流出は依然として続き、問題はいつこうに解決しないにもかかわらず、マスコミを始め国際社会はインドシナ難民問題に以前のように関心を持たなくなった。いわゆる「同情疲れ」である。

④ タイ政府としては国内の難民数を減らすためにも定住を進めたいが、その事自体が難民流入の誘因になっているふしがある。この悪循環を断つべくタイ政府はこれまでも、キャンプの統廃合や難民流入抑止策を講じてきた。

⑤ 一方キャンプの難民たちにしてみれば、本国に帰れる日をずっと待っている人々もいるが、事態が長期化すればするほど、この出口のない状況からめげ出し、第3国で自らの将来を切り開きたいという願望は高まる。しかしそれも思うようには進まない。

カンブチア難民をめぐる見えない壁

79年後半、数十万とも言われるカンブチア人がタイーカンブチア国境に押し寄せた。ポル・ポト時代の暴政の結果、人々は疲弊し飢餓や地雷、マラリアなどのために多くの命が失われた。その悲惨な状況は世界の耳目を集め、救援活動が開始された。これ



日本からの古着を着たラオス難民の子どもたち
/ 毎日新聞社提供

表① 各国・地域別定住受入れ数推移

	受 入 れ 国	1975~83	1984	1985	1986	1987. 3	計
1	米 国	524,137	47,661	40,561	33,011	5,088	650,458
2	カ ナ ダ	89,777	5,812	6,059	5,771	1,757	109,176
3	オーストラリア	84,079	8,554	6,447	5,624	1,678	106,382
4	フ ラ ン ス	93,218	3,957	1,527	5,291	503	104,496
5	西 独	22,387	88	230	345	27	23,077
6	英 国	16,388	174	104	550	25	17,241
7	香 港	9,610	19	49	70	8	9,756
8	ス イ ス	7,785	43	83	144	7	8,062
9	ニュー・ジラード	5,374	565	562	555	216	7,272
10	オ ラ ン ダ	5,465	164	206	210	136	6,181
11	ノールウェー	4,084	597	322	273	79	5,355
12	日 本	2,792	1,037	636	346	150	4,961
13	ベルギー	4,180	72	79	40	14	4,385
14	デンマーク	3,141	134	96	230	12	3,613
15	イ タ リ ア	3,013	3	2	46	6	3,052
16	スウェーデン	2,785	68	65	115	19	3,052
17	中 国	2,853	-	-	20	0	2,873
	そ の 他	10,899	201	1,280	135	1	12,516
	計	891,967	69,149	58,308	52,776	9,726	1,081,926

を機に、日本でも民間の難民救援活動が組織的に取組まれるようになったことは周知のとおりである。

国境ぞいにくつもの難民キャンプができた。これらはその後、タイ国の UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）管轄下の難民キャンプと UNBRO（国連国境救援機関）が人道的援助を行う難民村の2つに大別されていく。難民村の20数万人の人々はカンブチア人の行政組織の下にあり、「難民」とみなされなかったのである。このような枠組みの違いが、カンブチア人の運命を左右してきた。

塗りかえられた国境の地図の中で

82年にシハヌーク、ソン・サン、キュー・サンファン（ボル・ポト派）の3派は連合政府を結成した。これら国連に代表権をもつ国境の勢力と、ベトナムに後押しされたプノンペンへのン・サムリン政権との間で、毎年乾季になると軍事衝突が繰返された。84年秋から85年4月にかけての大規模な攻撃で、3派の軍事拠点はことごとくつぶされた。国境ぞいに住んでいた人々はタイ領内に避難し、何度か移動の後現在のように落ちついた。国境の地図はすっかり塗りかえられたのである。夜に襲う攻撃の度に、人々はわずかな身の回り品を持ち緊急避難する。JVCが補助給食を担当しているノンチャンの場合、5回も移動し、その度に受益者数の調査、施設の建設、等はやり直しとなった。栄養教育のプログラムは何度も中断された。その様な不安定な状態では、乳幼

児にふさわしい栄養のある食事を与えるといった人々の基本的な生活までがおごなりにされてしまう。

チャンスを求めて

カオイダンの柵を越える人々

一方、カオイダン・キャンプにいる人々は、夜間の強盗の侵入に脅かされるなど安全とは言えない環境ながら、民間団体の実施する職業訓練や福祉などの援助を受けることができ、また許可が下りれば第3国へ定住することができる。そうしたチャンスを求めて、あるいは家族との再会のため、国境から10キロばかりのカオイダン・キャンプへ夜の闇にまぎれてしのびこむ人々が続出した。侵入者はタイ兵に見つかれば国境に送り返されるので身を隠して暮らさねばならず、食糧の配給もない。ついにはその数が無視できない数となり、2回にわたって特別の食糧配給カードが発行されるにいたった。

そのような状況下でタイ政府は再三にわたって、第3国定住が進まなければキャンプを閉鎖し、カオイダン・キャンプの人々を国境に送り返すといひ続けてきた。実際アメリカは、いったん打切った定住のインタビューを対象者を限って再開したが、カオイダンの場合、定住条件に合う人々はすでにほとんどいなくなっている。

「閉じこめ」と「ふるい分け」のラオス難民

国境のメコン川をはさんで、ラオスの首都ビエン

チャンを望むタイの町ノンカイ。ここに83年まで1万6000人規模のラオス難民のキャンプがあった。今はその跡形もなく草原になっている。もともとノンカイはラオスとの交易で栄えた町であり、言葉も近い両国の人々の往来は盛んだった。つい数カ月前には、輸出制限が緩和されラオスからの買出しが増えたという。渡し船の棧橋には人気のない入国管理事務所があった。ここでは国境を越えることがさほど特別な事ではないのかもしれないと思わせる。

タイの政府はノンカイ・キャンプを閉鎖し、本国に帰る意思のない人々はバンナーポー（ナコンパノム）キャンプへ移動させた。ここは拘留センターと呼ばれ、救援活動、部外者の見学なども制限され、当時は第3国への定住の可能性も断たれていた。この措置により、実際しばらく新着難民の数は減少した。

85年7月以来タイ政府は、ラオス難民については入国時に面接を行い、本当に難民なのか、あるいはより良い生活を求めて来た「経済難民」かをふるい分ける制度を始めた。県レベルのタイの役人が面接し、UNHCRの職員が立会う。難民でないと言われた人々は別に収容され、いずれラオスに送り返される事になっている。

一方、インドシナ難民のなかで唯一、自主的な本国帰還の道が開けているのがラオス難民である。現在までのところ自主帰還計画によって帰国した人々は今年7月末までに3124人であるが、これをもって積極的に推進しようと言う声がタイ国内の救援関係者、受入れ国政府大使館などでも高まっている。

少数派で難しい立場にあるベトナム難民

船でタイに流れつくベトナム難民は昨年一年間で3864人と数は多くないが、海上で海賊に襲撃され金品の強奪、暴行を受ける例が後を断たない。このためUNHCRが海賊対策の予算をつけ、タイ政府が巡視艇を出して監視している。たまにタイの漁民が難民に対する暴行で訴えられ有罪となったという、小さな記事が英字紙にのることがある。

タイのベトナム難民は他の難民とは別のキャンプに収容されていた。そのシキウ・キャンプが86年に閉鎖され、今はバナニコム・キャンプ内の特別区画に押込まれている。

やはり数は多くはないが、陸路カンブチアを通過してタイの国境にたどりついたベトナム難民がいる。彼らは敵対するカンブチア人の中であって難しい立場にある。このランド・ピープルはUNBROでなく、

戦時に捕虜などの安全を図る赤十字国際委員会(ICRC)が保護している。国境の難民サイト2内にベトナム難民を収容する一角がある。

また直接タイとは関わりはないが、ベトナムから家族再会のための合法出国計画の事務処理はバンコクを拠点に行われている。UNHCRが間に入り、ベトナム政府と受入れ国政府が手続きを進める。ホーチミンとバンコクを結ぶ週1回の定期便で出国し、それぞれの受入れ国に向かう。

難民が直面する危機

難民という言葉はかなりの幅をもって使われている。ここでは、人種・宗教・政治的信条ゆえの迫害とか、戦火・飢えなどのためにやむなく国境を越えて逃れなければならなかった人々を難民と呼ぶ。多くの場合人々は極限状態で難民となって流出する。そのためか、一般に難民といえば見た目の悲惨さが印象づけられているように思える。しかしそれは難民の苦難の一部でしかない。いくら援助によって最低限の衣食と仮の住居が与えられても、それは難民状態からの解決につながらない。

① まず、それまでの生活が根こそぎにされ、破壊される事からくる物質的危機。水・食糧などの欠乏に見舞われる事が多い。迅速な物質的援助が必要。

② 人権を保護すべき国家の枠の外に出てしまい、無防備の状態におかれることからくる生命・人権の危機。国際的な保護が必要となる。

③ それまで属していた地域の共同体、言語、文化、生活様式から切離され、制約の多い不安定で異質な状況に放りこまれることからくる精神的・アイデンティティーの危機。自立した正常な生活を取りもどすための援助が必要。

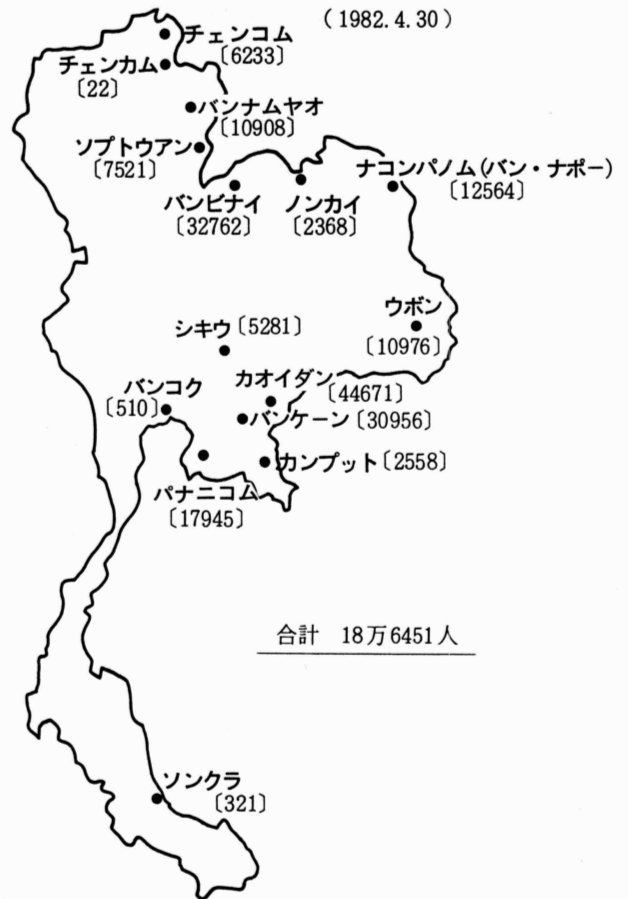
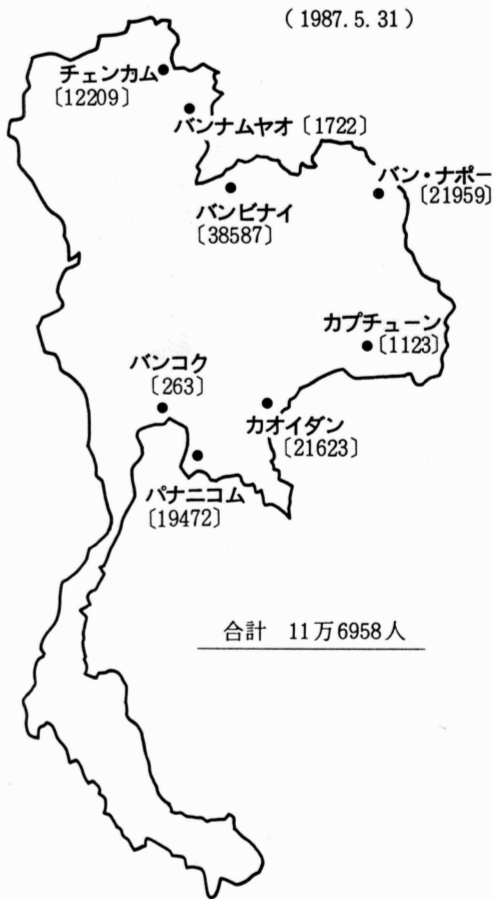
以上のべてきたように、インドシナ難民問題の複雑さ、困難さはひとつとおりではない。そこには政治的な関係があり、背景にはインドシナ三国の経済的な行きづまりがある。

しかし、そのしんどさをのり越えて関わり続けていくしかない。難民というとらえどころのない人々の集団をでなく、現代史の渦中で翻弄されながらもしたたかに生きているひとりひとりの人間の顔を思い浮かべながら。

難民となった人々を物心両面で支えると同時に、彼らが本国に帰れるような、これ以上難民が出なくてすむような状況を作る努力が必要である。

(本橋 栄)

タイ国内の難民キャンプと人口



週1回の米の配給(国境の難民村・サイト2)
/ 毎日新聞社提供



合法出国が中断され、ポート・ピープル(ベトナム難民)は
また増えている / UNHCR 提供

カオイダン技術学校(西崎憲司記念技術学校)の意味するもの

カオイダン・キャンプの閉鎖が伝えられて半年が過ぎた。難民受け入れ国のインタビューが再開され、難民たちも浮き足立っている。しかしどれだけの方が第3国定住の夢を果たせるのか。今年5月末の時点でも2万人以上の人々が滞留している。そのほとんどは第3国定住の望みを断られた人たちだ。にもかかわらず、今日もキャンプに忍びこんでくる難民がいるという。彼らはカンブチアでの生活に見切りをつけ、第3国に夢をたくしてやってくる。

JVCは1981年、カオイダンに技術学校を開き、難民たちが第3国に定住、あるいは本国に帰還した時の生活に有利なようにと、自動車やバイク等の修理技術を訓練してきた。どちらの道も閉ざされた今、果たして技術学校にはどんな意味があるのだろうか。

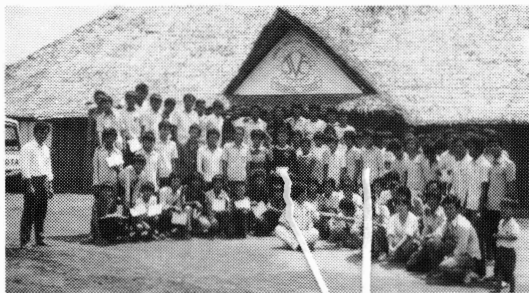
バンコクのJVCニュースレターには次のように書かれている。

— 技術学校ではハンディキャップを持った人とその家族、家族のいない未成年、社会的に適應するのに問題を持った人々を優先して入学させてきた。今回クラスをトップの成績で卒業した難民に、彼のこれまでの人生を聞く機会を得た。

彼は37歳で、一家の主である。プノンペンでは薬学を勉強した。ポル・ポト政権の時彼とその妻は投獄され、彼女はそこで初めての子供を産んだ。彼女はその時の苦しみから今も立ち直っていない。



カオイダンの屋下がり



技術学校の前で

体は病気がちで、神経も病んでいる。今彼女は、ほとんどベッドに寝たきりの状態である。

彼は言った。「あの日々の中で、私は自分の知識と、専門技術を忘れるように努めました。さもなくば私は殺されていたでしょう。ここ(カオイダン)へ来てから私は過去の痛みを取り去ろうと、いろいろな方法を試みました。しかし私をいやす方法はありませんでした。

ところが、JVCの技術学校で勉強を始めてから、私は自分自身が回復してきていることを感じています。過去の知識や経験の断片を考え、まとめることが再びできるようになりました。それに健康ばかりでなく、自信もと戻してきました。私はまだこの成果が信じられません」(矢野和貴)

カオイダンで学んだ修理技術がどれほど第3国で役に立ったかは定かではない。たとえば日本の場合自動車修理工になるには日本語による国家試験の壁が立ちはだかっている。しかし新しい技術の習得は希望を失った人々の新たな目標になりうる。簡単な技術では得られない喜びがあるのだ。ところがUNHCRが認めた1987年度の予算は前年度より8%減らされた。教材がそろわず、思うような授業ができないとの声が現場から届いている。

難民キャンプが難民を呼び寄せているのではないかと批判がある。難民をこれ以上出さないためにはカンブチア国内の復興を考えるべきであろう。すでにJVCはその方針を打ち出した。しかし難民たちがいる限りキャンプは存在し、技術学校もなくなることはない。“キャンプの閉鎖”が今後どのような変化をもたらすかわからないが、とりあえず来年も存続することは間違いないようだ。

タイ近況報告

バンコク渉外担当 柴田久史、大いに語る



□以前に柴田さんが働いていたころと比べ、バンコクは変わりましたか。

タイで仕事をするのは5年ぶりです。以前にも増して活気がありますね。冷房車が増えて、サムローが減りました。メインロードではトラックをバスのようにして人を乗せることはなくなったし、発展しているなど感じました。

街の喫茶店や飲み屋に行くでしょう。以前は外国人ばかりだった店も、今はタイ人が多い。中産階級が形成されていることだと思います。新興住宅もどんどん建てますし。

それから変わったことといえば、アメリカ資本のファーストフードが進出し、アイスクリームやピザのお店も増えています。

JVCのオフィスが引越してもうすぐ1年になります。人の出入りが少なくなった分仕事には打ちこめるようになりましたが、外部から訪れる人はJVCを知っている日本からのお客さんぐらいなので、ちょっと活気がなくなったような気がします。日本人会にJVCがあったころは日本人会に寄った人が顔を見せていたのですが。これはJVCが日本人社会から独立したということかも知れません。

□メコン川流域が干ばつたようですが、タイもひどいですか。

最近のタイのニュースは北タイと東北タイの干ばつのことです。連日のように新聞に載っています。私が見てきた田んぼでは苗床ができていないのに田植えができない状況です。米を地主から借りる人も増えていました。5杯のお米を借りると2杯が利子になってしまいます。8月中に雨が思うように降らなければ、来年は大変なことになると思います。

JVCが以前に掘った井戸も、ふだんの年ならあふれるように水が出るのに、ほとんど出ないという状態でした。

□定住難民受け入れのため、各国のインタビュー・チームが来ているようですが。

私がタイを発つ時、ちょうどアメリカのインタビュー・チームが来ていました。日本からのチームはラオス難民を何人が受け入れていたようです。どこの国も受け入れには消極的です。

ボート・ピープルについていえば、昨年より2倍以上の人が上陸して来ます。これは多分ベトナムのO.D.P(合法出国計画)が中断されたからだろうと思います。

難民たちはタイと国際社会の間で翻弄されています。

カオイダンを閉じると発表されて以来、難民たちの動揺も大きく、カオイダンの技術学校をやめて語学を学ぶ人が続出しました。治安も悪くなっているようです。

カオイダンの閉鎖が言い渡され、UNHCRが難民として認めない不法入国者が何百人か国境に返されましたが、それ以降大きな動きはありません。各国のインタビュー・チームが来る間は静観というところでしょうか。

□国境のJVCのプログラムが拡大するそうですが。

サイト2というソン・サン派の難民村の北半分をJVCが担当するようです。これまでは複数の団体が補助給食をしていたのですが、それをJVCが一手に引き受けるというわけです。対象者についていえば3歳以下が1歳以下に引き下げられますので、人数も6000人が8000人に増える程度で、現場での仕事量はそれほど大変ということではないと思います。

□国境のプログラムについてはいろいろ批判があります。

それをあえて拡大したわけは。

このプログラムはUNBRO(国連国境救援機関)の管轄下にあるのですが、UNBROとしてはいろいろな団体が同じプログラムをしているので、それを1つにまとめたいということのようでした。JVCもそれに賛成したわけですが。もちろん私たちも難民たちの自治が腐敗していることは知っているし、人道的援助といっても結局は軍隊を食わせているのではないかとという疑問もあります。このことに関しては軍隊が主導権を握らないように自治権をコントロールする必要があるでしょう。これはソマリアで難民の自立、自治を奨励してきた私としては驚きです。

以上のことを考慮したとしても、ベトナムを嫌って、人々が出てきます。彼らはもうどこにも行くことができません。希望もありません。彼らがいる限り、私たちもこのプログラムを閉じることはできないのではないかと思います。

私はここで強調したいのですが、UNBROに日本がその資金の28%を拠出していることです。JVCがこのプログラムに疑問を持ち、引いたとしても日本からの援助は続けられるのです。そして難民の声を日本に代弁する者がいなくなってしまいます。日本人が知ろうと知ると、日本は国境にお金を出しているのです。この事実は忘れないで下さい。政治的な動きに対し、民間団体の力は限界があります。大ぜいの人がこの現場を見、難民問題についてともに考えて下さい。

西側の開発協力を

JVC 事務局長 星野 昌子

ラオス政府の要請と NGO の共同声明

ラオス民主人民共和国 (LAO・PEOPLE'S DEMOCRATIC REPUBLIC、現在のラオス人は外国人に対し、自国を LAO・PDR し、PDR を省略して、LAO とだけ呼ぶのを滞在中間かなかった) の首都 ヴィエンチャンで去る 6 月 3, 4, 5 の 3 日間、UNDP (国連開発計画) とラオス政府の共催で行われた「ラオスの開発を評価、検討する円卓会議」に出席する機会を得た。

昨年 4 月にジュネーブでは、同じく UNDP が、「LLDC (最貧国) への開発新計画実施に関するアジア大平洋円卓会議」の一部として、ラオスの開発問題を取り扱ったが、今回の会議は、ラオ・PDR となって、初めての西側政府・国連・民間非営利団体 (NGO) 代表者に対する援助要請のための農業、婦人、衛生等分野別説明会とも言えるものであった。国連関係 15 組織、11 国政府代表、NGO 11 団体が出席した。参加を希望する上記関係者で、バンコクから週 2 便の飛行機は満席。私たちはかつて難民キャンプのあったタイのノンカーイから、メコン川を渡ってラオス側の舟着場から入国した。

町にただ一つしかない国際級ホテル、ランサーン (百万の象の意) が会議場兼宿舎にあてられ、会議の公用語は英語であった。

援助を必要とする主たる分野として次の項目が強調された。

農業：全国に 1130 万ヘクタールの森林の内、年間 40 万ヘクタールが山岳民族により焼き払われる。山岳民族の低地ラオ族に対する人口比が年々増大することも加わり、焼き畑をいかに食い止め、低地において定着農業に就業させるかが目前の課題。焼き払われた森林の蘇生とそのための人材養成が急がれる。

保健医療分野も、現状は 8325 人に医師 1 人、婦人問題分野におけるのと同様、人材・施設・物資・資金すべてが不足している。

NGO 代表者は NGO の活動についてはまだ十分な理解を持たないと思われるラオ PDR 政府の関係者に、NGO への理解を深めていくための共同声明

を練り、発表した。草の根の人々との間に人間関係を作りながら共に働く NGO の仕事は、多額の援助金・高度技術によるインフラストラクチャーの整備等に関わるバイラテラル (二国間援助)、(マルチラテラル (国際機関を通じた援助) アシスタンスとは異なること、したがってその不足分の補充という期待は的外れである。また NGO が円滑に仕事をするためには、入国許可や地方通行パスの発行手続の緩和、敏速化が望まれることを述べた。

会議中個々の NGO の活動や計画に説明する時間が不充分であったが、JVC としては今回参加できたことを感謝し、今後ラオス国内での活動に関心があることを述べた。

17 年ぶりのラオスの街

1975 年以来、主として東欧に協力を求めて来たラオ PDR だが、昨 1986 年 4 月のジュネーブ会議を踏まえて、今回は西側諸国政府・国際機関のみならず、NGO をも含めて広く協力を求めるという、大きな方向転換の表れを示すように思われた。

市街は以前より清潔だった。人々の様子も小ざっぱりとして 1960 年後半頃とあまり変化はない。自動車が減り、自転車が増えた。しかし目抜き通りには、レストラン、仕立屋が店を構えるが、少数の機械部品・雑貨・駄菓子等を除いては、商品がほとんど見られない。以前の繁栄を知るものには寂しくうつるが、かつて溢れていた金製品・洋酒・化粧品・輸入食品等は庶民の生活には関係のないものだったと改めて実感する。滞在中、毎朝食事をしに出かけた朝市も賑わい、訪問した友人たちの家では鶏・豚を飼って自給していた。

タドゥアからの出国は「タイの入国査証の他に、出国許可を取れ」と、しばしごたごたしたが、結局川を渡った。外国人はトラブルを避けるため空港から出入する方がよい。

小舟が進み、ノンカーイの舟着場が近づく間、75 年以来、この川を渡って難民となった人々の心に思いを馳せた。これからは自主帰還の進展に期待し、JVC もその方向で働きたいと願った。

今、われわれに何ができるか

カンブチア事業担当 古西 勇

「カンブチアについて親身になって考えているのはプノンペンで毎日顔を合わせている人たちばかりと思っていましたが、これだけ多くの人たちが今回の会議のために世界各国から集まれたことは何と素晴らしいことでしょう。とても心強く思います」

AFSC プノンペンの代表者ナンシー・スミスさんが、カンブチア国内の近況報告に先立ってこのように挨拶した。

昨年9月のアムステルダムでの会議から9カ月経った今年6月29日と30日の2日間、第2回「カンブチアに関するNGO会議」がベルギーのブラッセル、欧州キューカー協議会で開催された。20団体以上のNGOから30名以上の参加者を迎え、JVCからは前回と同じく古西が出席した。

議題は次のように多岐にわたった。

- カンブチア国内とタイ・カンブチア国境の近況
- 西側諸国と国連のカンブチア問題に対する姿勢
- アムネスティ・インターナショナルのカンブチアでの政治的投獄と拷問に反対するキャンペーン（彼らの情報の出所とキャンペーンの姿勢に対して懐疑的な意見が出された）
- カンボジア証拠書類提出委員会の民主カンブチアの集団大虐殺に対する国事犯告訴キャンペーン
- 国境における人権問題
- NGOによるカンブチアに関する共同出版物の取材と執筆の進行状況と、その本の題名やそれに添える推薦状の提案
- 今後のNGOによる国際キャンペーンの戦略とNGO間の調整についての話し合い
- CIDSEにより最近製作されたカンブチア国内の映画の上映

NGOによる共同出版物

「西側諸国の外交筋ではカンブチアの状況に関する受身の姿勢が見られました。それは実に重要な問題です。あるイギリスの外交官の次の言葉にはそれははっきりとみうけられます。『ねえ、現実的になりなさい。たった600万人じゃないですか』」

共同出版物を執筆しているエバ・ミスリビエック

さんの報告である。彼女は今年2月から3月にかけて取材旅行を行い、カンブチアでカンブチア人民共和国の職員と、タイで民主カンブチア連合政府のシハヌーク派、ソン・サン派、ポル・ポト派（クメール・ルージュ）のそれぞれの職員（ほとんどの場合国境沿いの難民村の行政官）、国連機関とNGOの代表者達、西側諸国の在バンコク外交官、特にオランダ、イギリス、日本、スウェーデン、オーストラリア大使館、タイの知識人や外務省政務班の人々と話し合う機会を持った。また、オーストラリアでは外務省と援助団体の職員と話をした。彼女はそれらの取材に基づいて100ページ近い共同出版物の第一稿を書き上げた。

「シハヌーク派とソン・サン派の代表者たちは、彼らの連合政府においてクメール・ルージュが指導力を握り彼らを威圧するのではないかと心配しており、もし彼らがカンブチアに戻った時には何が起こるのだろうと不安に思っています。ソン・サン派キャンプのある行政職員は次のように強調していました。『もし西側諸国が私たちに平和を与えるつもりなら、クメール・ルージュからの保護も同時に与えなさい。もしそうしないのなら、私たちに平和を与えるな』」

国境の近況と人権問題についての報告は、昨年11月から12月にかけてWFP（世界食糧計画）の使節団の一員として、UNBRO（国連国境救援機関）と国境で働くNGOの活動を評価してきたOXFAMのトニー・ジャクソン氏により行われた。

「国連はこれらの国境沿いの難民村は罪のない一般市民のキャンプだと主張しています。しかし私の意見では、全てのキャンプは実際には三派連合の軍事行動を支援するという主要な目的を持っています」

多くの論評を受けて、エバさんは共同出版物の第二稿の執筆に取りかかっている。その英語版は9月には完成されるだろう。日本語版の出版は遅くとも今年中に行いたい。ぜひ少しでも多くの方々にお読み頂けることを心から願います。

私のソマリア——1986年

元ソマリア派遣研修生 高畑辰弘

難民の収入増大計画

かまくら（雪の家）のような形をした、土で作ったかまどの中でパンを焼く。まず、小麦粉、イースト菌、塩、それに水を一定の割合でこね、生のパンを作る。次に炭でかまどを暖め、燃えカスを取り出す。そして生パンを乗せた鉄板を中に入れ、12～13分待つ。つまり、残り火でパンを焼くしかけである。薬品類を全く使っていないせいか、とても素朴な味がする。これがソマリアの典型的なパンの焼き方である。

JVCジャボレのインカム・ジェネレィティングプロジェクト（収入プロジェクト）を担当させてもらった。担当だなんてあまりにもおこがましい言い方であるが、常に“責任者はオレなんだ”と思って働いていたので、恐れずにこう書く。

このプロジェクトは、難民に職業を持ってもらい、それによって経済的に自立してもらおうという計画である。「難民の収入増大計画」とでもいおうか。

私がとりかかった時は、難民たちが自主的に手紙で参加を申し込んできており、パン屋、くつ屋、養鶏などが具体的に職業として、いつでもスタートできる状態にあった。私自身難民援助に関して初心者で、滞在期間もそう長くないということから、比較的やりやすいパン屋を担当することになった。

建築にあたりJVCは大工を1名出した。大工は建築指導のためのものであり、労働力の中心は難民自身である。建築物も無料で彼らに与えられるのではない。建築資材以外のもの、すなわち、作業台や一輪車、ドラム缶などにかかる費用を一年半の間に返金してもらうことにした。プロジェクトの中心はJVCではなく、あくまでも難民で、彼らがJVCを巻きこみ自立していけるよう配慮した。

設計の段階では本当に冷や汗を流した。建築のことなんて右も左もわからないし、第一パン屋のパンの字も知らない。それに難民たちの生活がかかってい

と思うと失敗は決して許されなかったと思った。

とりあえず、ソマリア各地のパン屋を見てまわり具体的に絞っていった。低価格でしっかりしたものをという方針で決めていった。自分でも簡単な装置を作ってパンを焼いてみた。結局できたのは、炭のような真っ黒のパンで、周囲に笑いと一抹の不安を振りまいてしまった。

仕事はそのほとんどを人力に頼ったものである。たとえばセメントを作るのにも機械など使わない。ピラミッドを作ったエジプト人たちを思った。暑い中での労働はやはりしんどい。太陽はそんな私たちのことなどおこまいなく、空で笑い転げる。しかしそんな中で彼らは楽しく仕事をする術を心得ていた。誰かが口にしはじめた鼻歌に一人和し、二人和し、最後に大合唱になる。ドラム缶をたたいて調子をとる。誰かのおかみさんが力のつくソマリ茶を持ってくる。

忙しすぎる日本ではそんな風に働けないし、そのように働いてはいけないう状況になっている。“昔の日本はこんな風だったのかな”と思った。やはり仕事は生活のためという目的のほか、本質的に人間を幸福にさせるべきものだろう。肩をぶつけあい、いがみあい、誰のための仕事なのかその人自身わからなくなるような状況は悲しい。

「これはあんたたちの仕事なんだ」

さて、当初の私は彼らを通して人間の底力、極限に立たされた人間が見られることを期待した。住み慣れたエチオピアの地を捨て、命がけで道なき道を歩いてきた。それも兵隊の目を避けて夜間だけ…。そんな彼らにとって今回の機会は生活再建の糸口となるものだった。彼らの不満、悲しみを一気にぶつけることができる。私もそれに見合うだけの気力と意志を用意した。

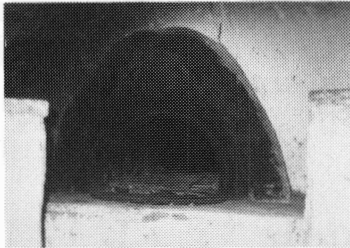
たしかに彼らをよく働いた。しかしそれは私の目の前にいる時だけであることに気づいた。約束の時



▲配給を受ける
難民たち



▲ソマリアの陽気な仲間



▶パン焼がま



◀歌は唯一の楽しみ
(筆者)

間に遅れたり、途中で家に帰ってしまったり、何日も無断で仕事を休んだり、私に隠れて仕事から避ける行動が目立った。私は彼らにとって雇用者だった。彼らは彼ら自身の感覚の上で使用人であった。彼らは始めからこの仕事をそのように考えていたのだ。希望に満ちて働き始めた私は、期待と現実のギャップに耐えられなくなった。私は何か裏切られたような気がした。「これはあんたたちの仕事なんだよ。オレのための仕事じゃないんだよ」。私は何度もそう怒鳴った。集まりの悪い日が続くとう具をまとめて帰ってしまったこともあった。

「やる気のない人はやめてもらいますよ」。私の一番言いたくない言葉だった。そこまで言わせてしまう状況になっていた。それに加えて彼らは考えつくもの全てを要求してくるのだった。最初の約束事など無視して、である。私は悲しくなって、同室のソマリア人にその時の気持ちを打ち開けた。彼はさもあらん、というようにこう言った。

「それが難民の現状だよ。彼らに期待するのが無理なんだ。たしかにエチオピアから逃げてきた時は命がけだった。極限の日々だった。だが今は違う。難民たちは毎日援助物資を食い、茶を飲んで無駄話をして暮らしている。人間が腐るのはあたり前だよ。帝国主義諸国の侵略にも屈服しなかったワシらソマリ族は、今援助物資という甘い汁のためにだめになり始めている。われわれソマリア国民はエチオピア難民と同じ貧民だよ。毎日生活に四苦八苦して生き抜いている兄弟がいるかと思えば、他方で援助物資を食って遊んでいる兄弟がいる。不自然極まりないことだよ」。一步キャンプを出ると、そこには地元民の部落があり、天候不良のため不作に苦しんでい

る。家畜はやせ、食糧の値段は上がっていた。

いったい自分は何者か

私のやっていることは何だろうと思った。私たちは難民世界の中だけを見、生活保障するのみならず、ご丁寧にもパン工場まで建ててやっているのであった。いかに質素にデザインしたつもりでも、彼らに与えた柱4本でソマリア人の平均年収になってしまうのである。私自身、難民の精神の破壊に加担しているように思えた。

難民の生活は今や安定している。難民はソマリアの国の中で1つの職業のようになり、物乞いを生活の術と割り切っている。援助は一方的にするものでなく、お互いの足りない部分を補うような形で行われるべきだ、私はそう考えるようになった。まず、対象者である彼らとミーティングを持ち、互いに胸の内を話すことから始めた。—この仕事をJVCの仕事としてではなく、あなた方の仕事と思ってほしい、いつか援助は打ち切られるのだから新たな在り方を考えなければならない—そのようなことを話した。彼らは納得してくれた。仕事は軌道に乗り始めた。

問題は一応解決した。悩まなければならなかったのは己の無力さだった。本当に何もできない、何も分らないという局面があった。くやしいほど体が動かない。頭も働かないのであった。ソマリアの大工さんや日本人の技術者、あるいは難民の人々に背負われ、惨めな姿をさらすことが多々あった。それが多分本当の私の姿だった。難民たちに偉そうなことを口走ったが、そんなことを言えるほどの者ではないのだ。受験を通り、知識を入れて、ソマリアくん

だりまで乗り込んできて、私は何者かになった気であった。しかし、単に私は日本で求められる軌道に乗っていただけであった。丸裸の人間が勝負するところでは、そんなものはまったく意味を成さないのであった。私は無力だった。私が救おうとしていた難民たちは、はるかに強かった。彼らは兵隊たちから逃れ、国境を越え、援助にしがみついても生き延びている。それだけでも大したものだ。なぜなら、彼らの仲間の多くは途中で死んでしまったのだから。「生きる」ということに関しては、彼らの前で私は猫のようなものだった。

私は「援助はいつか切れるんだよ。欲しい、欲しいというだけではだめなんだよ」と彼らに言っていた。しかしそう言っている自分はどうなのか。親から援助されている他立人間ではないか。そんなにご立派な奴か。私が今まで問題視していた要素は自分自身の中にあっただけだ。私は力が抜けていくのを感じた。

モハメッド・イスマイル

そんな状況の中で私は空回りし始めた。私自身不安定で倒れそうになった。そんな時に支えてくれたのが、対象者である一人の青年だった。彼は言葉でなく、行動で私を力づけてくれた。モハメッド・イスマイルという私と同位年の難民の長だった。「ここでパン屋を成功させ、10年後には友の待つエチオピア、オガデンに帰るんだ」という彼は、対象者の中で唯一表裏なく働いてきた男だった。朝1人で私を呼びに来た。マラリアで熱にうなされても彼は現場に姿を見せた。彼は彼らの利害を代表し、私はJVCの利害を代表しているのでしばしば言い合いになったりもした。しかし彼とつきあっているうちに「こいつは極限に立たされているな」と直感した。



巣箱のようなジャボレのコンパウンド私たちの棲み家だ

真剣に今の世界からの脱出を考えているようだった。働いている時に見せる何か思いつめたような横顔には、何かしら、成り上りボクサーの趣があった。私は彼と同年代である。私も含めて同世代の連中に、こんな顔のできる奴は何人いるだろうかと考えた。モハメッド・イスマイルの姿は私にとって魅力的だった。自分の無力さを感じながらも「今オレが倒れたらどうなるのだ」「オレが力を抜いたらモハメッドを裏切ることになる」。そんな気持ちで日の登るころには私もスコップを持っていた。工事は着々と進行し、私がソマリアにいることができる時間も少なくなってきた。

パンの味

難民は終始私に優しく気が良かった。毎日どこかの家の食事に呼ばれた。しかし、そんな彼らを素直に受け入れられない自分がいた。前に述べたとおり、私は彼らに耳の痛いことを言い続けた。いろいろトラブルもあった。それに私自身様々な面で未熟だったので、彼らにとって必ずしも必要であるとは思えなかった。

工事は私がキャンプを立つ前日に終了した。たしかに1つの区切りはつけられた。楽しかったことも多く、こんなに働いたのも始めてだった。しかし、「この土地の人たちから見てオレはいったい何だったのだろう」と考えた。情ない答しか思いつかなかった。

荷作りをし終えた当日の朝、モハメッドが顔を炭だらけにして私の部屋に来た。パンが焼けたから見に来てくれ、というのだ。寝ぼけ顔のまま現場に行くと、6人の仲間が疲れ切った顔で私を迎えてくれた。かまどの表面に少しヒビが入り、煙がたち上っていた。私の出発に間に合わせるために、徹夜でパンを焼いてくれたのだった。焼き上がったパンをおそるおそる食べてみた。一部が生そのままで不格好だったが、やはりうまかった。仲間たちは自信なさそうだったが、私が2個全部食べたのを見て安心したようだった。

「ありがとう、さようなら、タカハタ」。
一番年長の、もう50歳に近い一人が言った。「あんたは透んだ心を持っているよ。ワシらはこんな身の上だから、今後どこへ行くかわからん。ここでパン屋をやって一生安らかに暮らせるとは思っていない。だけど、どこへ行ってもあんたのことは忘れないよ」。うつむきがちだった私の顔は情ない笑顔に変わった。

保健衛生プログラムを引き渡す

看護婦 青井千恵

ジャボレ・キャンプにおける保健衛生

ソマリアでは難民緊急救援が始まった当初より、イギリスのOXFAMが徹底的な調査をもとに作成したキャンプ内のP.H.C(プライマリーヘルスケア)^(注)についてのガイドラインを、RHU(難民保健局/ソマリア政府)を通してソマリア国内の全キャンプで使用している。現在、各キャンプに配属されているRHUナースは難民キャンプのP.H.C.について4～5年の経験を持っている。OXFAMは、高額な援助が保健衛生に集中しないように、つまりキャンプと地域の医療格差を防ぐ意味でも、外国人スタッフはスーパーバイザーとしてP.H.Cの体系づくりと、RHUナースの指導に重点をおき、6カ月ないし1年の早期撤退を奨励していた。具体的な資料はないが、現在はほとんどのキャンプのP.H.CはRHUナースのみで実施している。

ジャボレ・キャンプも、1月に日本人ナースが帰国して以降は、事実上5人のRHUナースの管理に任されていたが、ガイドラインが徹底しているため、彼らだけで十分機能し得るほどになっている。キャンプ内では難民の中から50人程がCHW(コミュニティーヘルスワーカー)として選ばれ、1年の教育のあと家庭訪問をしたり、クリニック等でRHUナースのアシスタントとして働いている。ジャボレキャンプでも、一期生がすでにクリニックの診察を任されていた。CHWはクリニック中心ではなく、家庭訪問そして衛生教育による疾病予防という重要な役割を担っている。

サウジアラビア赤三日月社

不本意なSRCS(Sawdi Red Cressent Society)への引き渡し

SRCSはジャボレ・キャンプ開設当時より食糧調達を行ってきた。ジャボレ・キャンプの保健衛生プログラムを引き継ぎたいという意向は1年半ほど前よりあったらしいが、今年4月に突然、SRCSとソマリア政府間でジャボレ・キャンプの保健衛生プログラムをSRCSが引き継ぐという公式の決定がJVCの承諾なしになされた。SRCSが何故そこまでこのプログラムをしたいのか、はっきりした理由はわからず、“イスラム教の同胞を助けるため”という話

も聞かれたが、モガディシュで話し合いを重ねたうち、JVCに対し設備にかかった費用を返却するということで、JVC側としては納得のいかないまま、SRCSにプログラムを渡すことに同意した。

6月16日にSRCSが来キャンプ。JVCから資料等を手渡し、6月23日をもって完全にSRCSに引き渡した。現在はSRCSの医師がアドミニストレーターとしてキャンプに残っている。JVC側として引き渡す際、RHUナースとCHWで十分機能しているP.H.Cの体制を延ばす方向にするよう強く要請した。医師が入るということで、今までクリニック中心でないP.H.Cを目指していたものが、医師のいるクリニックに難民が依存することを私たちは心配したためである。

引き渡し後は医師は実際に診察はせず、RHUナースの従来通りの活動に任されていたが、P.H.Cの重要な役割を担うCHWのほとんどを解雇してしまった。その他の変化については、あまり干渉できないので状況を把握できずにいる。けれども、キャンプ内に特に大きな混乱はない。そこで思うのは、ソマリアの政府側もそしてもちろん難民にも、彼らが良しとするものを選択できるだけの発言権がないということである。

OXFAMのガイドラインが与えられればそれを実施する、そしてSRCSがその方法を変えればそれに従う。残念なことである。OXFAMのガイドラインによる統一されたキャンプのP.H.Cについては西洋的な発想や方法の押しつけなど批判もあるかもしれない。けれどもRHUナースはここからお金のかからないP.H.Cの概念を飛躍的に学んだ。遊牧民の多かったこの国の人たちが家庭訪問という方法を学んだ。それは十分評価のできることである。今後不幸にして同じような緊急救援のニーズが他の国で生じた場合も、その国の将来を考えると早期にNGOが統一した方向で、そして同じレベルで救援活動がなされることが理想的だと思う。その点でも今回のSRCSへの引き渡しは腑に落ちない点が多い。

今後、RHUナースがP.H.Cをキャンプ内で、そして将来はその経験を地域へどのように展開していくか興味深い。

注) 地域に密着した基礎的保健・医療サービス

7月の動き

JVC神奈川始動!

地域に根ざした活動を目的に、5月から活動を開始したJVC神奈川。横浜は、山下公園を見下ろす産貿ビル9階、財神奈川県国際交流協会の一部に、間借りしながらがんばっています。その施設とは、国際交流コーナー「KIS(Kanagawa Information Stationの略)」とって、県内外の市民グループに開かれた情報交換、作業、ミーティングのためのスペースです。

JVC神奈川は、定住難民プロジェクトなどJVC独自の活動をする一方、「KIS」の企画、運営に協力しています。

また、現在神奈川では、NGOや県内の市民グループが集まって、身近なところからの海外協力とネットワーク作りをテーマに、「市民とアジアを結ぶ国際フォーラム」を準備しています。フォーラム自体は来年3月に2泊3日に行く予定ですが、そのプレ企画として、講演会や映画祭、チャリティ・ウォークなどを企画しています。このフォーラムの事務局は、「KIS」にあり、JVC神奈川の山口も事務局の主要なスタッフとして活躍しています。

JVC神奈川ではボランティアを募集しています。ワープロ入力や事務手伝いをして下さる方、大歓迎です。(山口誠史)

海老名青年の祭典バザーに参加

7月25日、26日、神奈川県海老名市で開かれた「青年の祭典」に、JVCはシャプラニールやSVA(曹洞宗ボランティア会)サヘルの会などとともに参加しました。当日は真夏の太陽が照りつけるかと思うと、急に雷をともなった夕立ちが襲ったりという状況でしたが、「待てないプロジェクト」の人たちの応援や劇団JVCのパントマイムも加わって、なかなかの盛況でした。

バザー用品も、神奈川県在住の会員の方々に呼びかけた結果、家庭で眠っているお中元用品を送っていただいたので売り上げが5万7000円になりました。ご協力下さった皆さん、どうもありがとうございました。(山口)

カンブチア、サンタピエップ(平和)技術学校が落成

前日までの雨も上がった7月15日、サンタピエップ(平和)技術学校・ワークショップの落成式が行われ、カンブチア政府代表(運輸通信省、輸送局長)、各NGOの代表、スタッフが出席した。日本からは、足立房夫さん(自動車労連、中央執行委員)、飛鳥寛恵さん(僧侶)、松井やよりさん(朝日新聞、編集委員)、前川仁志さん(京都新聞、編集記者)、森枝卓士さん(写真家)、それにJVC岩崎代表が参加した。JVCタイ代表のポンピモンさんも日本のグループに同行した。

ワークショップは約900平方メートル、高さ12メートルの鉄筋の建物で、トラックが同時に8台修理できる。設計はカンブチア運輸省の原案を川口昌宏日大教授(元JVC代表)が手直しし、それをさらに運輸省で検討してでき上がった。なお鉄筋やコンクリートなどはシンガポールから運び、レンガはプノンペンで調達した。

2階は教室になっているがまだ手を加える部分も多く、完成はしていない。倉庫やトイレの建設もまだで、実際に生徒を受け入れるのは早くても9月になる見込みだ。

7月25日に一時帰国した簗田健一さんは「落成式に間に合わせるため、一週間ぐらい前から突貫工事でもがんばった。とても重労働だったが間に合っうれしい。ほっとした。しかしこれで終わったわけではないので、もうひとふんばりしなければならない」といっている。

また岩崎代表は「JVCプログラムがカンブチア人に歓迎されているのを感じた。同時に期待の大きさもひしひしと感じる。それは一市民団体としては大



さあ、いらっしやい。いらっしやい。
(海老名青年の祭典バザー)

記念式典に参加した政府代表 NGO 関係者たち



きすぎる期待だ。なんとしてもその期待に応えるようにJVCも努力しなければならない」と感想を述べている。

日米高校生交流 in 東金

去る7月17日から21日まで、JVC 東金農場において、日米文化センター主催、日米高校生交流プロジェクトの一部として農作業交流を含めた、東金プログラムが行われた。

約1カ月間の日米高校生交流プロジェクトは、両国の高校生が、言語や文化の違いをこえ、飽食と飢餓、核戦争と平和、開発と保護などの地球的規模の問題を地球市民の一員として共に考え、率直に意見を述べあう機会と場を提供するものであった。これにあわせ東金農場では、“日常生活での衣食住を見直すことで、第三世界の問題解決を考える”ことのきっかけを作ろうと、地元高校生と広く市民の参加を募った。

プログラムは、東金市内高校生と米国高校生の討論会、郷土料理・タイ・カンブチア料理による日米交流記念式典、農作業交流、東金市内のハイキング等であった。

米国からは4名の生徒に付き添いの教師1名、市内高校生は約20名、それに郷土料理出品やホストファミリーとして陰ながらこのプログラムを支えてくれた東金市民有志が参加した。

参加した米国の高校生からみればNGOとしてのJVCが農業という具体的な活動をしていることに感銘し、高校生を含めた市内の人々は、今まで関心もあまりなかったような活動の存在に気づききっかけになった。地球上における種々の問題解決に対する市民の人々の意識の向上を計るものとして国内活動の必要性・重要性が高まっている。質のいいプログラム、イベント作りの難しさを改めて考えさせられた。(飯塚美奈)

事務局からのお知らせ

FAXの導入とテレックス番号の変更

これまでFAXがなかったためにご迷惑をおかけしていましたが、9月1日から導入することになりました。番号は03-835-0519です。

またテレックス番号も9月1日から変更いたします。番号は7604025 (JVCHQ UCアンサーバックコード)です。

募金内容が変わりました

JVCにはいくつかの募金の種類がありますが、プロジェクトの変化とともに新しく募金を設けたり、変更したりしています。このたびいくつかある募金を整理しましたので、次回からは新しい募金名で入金して下さいをお願いします。なお新設、変更した理由は以下のとおりです。

- グリーン・フォー・アフリカ募金

昨年はキャンペーンのための特別募金でしたが、今年から常設し、環境破壊されたアフリカの復興のために使われます。

- タイ・スラム募金

旧来は、クロントイ・スラム募金またはスラム募金とっていましたが、クロントイ以外のタイのスラムでも活動しているため、タイ・スラム募金に改名しました。

- スラムの子供奨学金・基金

旧来はデッグ・スラム奨学金・基金とっていましたが、デッグはタイ語で子供という意味ですが、始めての人にはわかりにくいというので、日本語になおしました。

- タイ農村募金

新たに農村開発のための募金を設けました。

- 定住難民募金

旧来は日本語家庭教師募金とっていましたが、プロジェクト名とともに募金名も変更しました。

- 医療募金とボランティア募金はなくなりました。

医療募金はJVCの姉妹団体、SHARE (海外医療保健情報センター) で取扱っています。ボランティアの健康管理にはJVC運営経費が当てられるため、ボランティア募金はなくなりました。

大空の下で

山口 誠史

不浄な手

ルークのトイレにしゃがむと、すぐわきに蛇口がついている。外のドラムカンにつながったこの蛇口の下には、空ビンがおかれている。この蛇口、単に手を洗うためではない。おしりを洗うためである。びんに水を入れて、流しながら左手でおしりを洗う。衛生的だし、気持ちが良い。最近、日本でもお湯が出るトイレが普及しつつあるが、ソマリアでは昔からこのスタイル。すすんでいるのである。ただ、ここでは手を使う。これが最初はちょっと抵抗があった。もちろん終わったあとは、外のドラムカンのところで、ちゃんと手を洗う。しかし、トイレから出た日本人は、思わず手を鼻のところへ持ってってしまう。

手を使うと言ったが、使う手は左手に限られる。ソマリア人はふつう、食事は手づかみ。ただし右手だけで左手は使わない。ごはんや肉はもちろん、スパゲッティもじつに器用に指にまきつけて食べる。日本人スタッフも、いっしょの時はもちろん手で食べる。時々、おもわず左手を使ってしまうと、ソマリア人に横目でにらまれる。

ブッシュでの出会い

ルークのトイレは天井がない。雨が少ない土地だから、さして不便さは感じない。それよりも、青空を見ながらのトイレもいいものである。ただし、日中あまり長くしゃがんでいると、暑さで頭がくらくらしてくる。その意味では、夜のトイレはじつにいい。満天の星空の下、流れ星をながめながらのトイレは日本ではちょっと味わえないものである。

青空の下という意味では、トイレよりもっと自然を味わえるのは、ブッシュトイレ、すなわち野ぐそである。JVCが補助給食プログラムをやっているフィーディングセンターには、最初のうち、トイレがなかった。ある時、私は朝からおなかの調子が悪く、仕事に出る前に宿舎のトイレにいていたものの、給食を配っているうちにどうにもがまんできなくなってしまった。幸い日本人の看護婦さんがティッシュを持っていたので、それをつかんでブッシュの中をかけ込んだのである。もちろん、水を入れたビ

ンでもあればそれでもよく、何も無い場合は、小枝か、石か、砂を使うということになる。ブッシュというのは、この乾燥地帯でわずかにはえている、高さ1メートルぐらいのとげの木で、葉は雨期のわずかな間以外はまったく無い。したがって奥の方に入らないと、なかなか周囲から隠れることはできない。しかも、センターのまわりは、たき木やフェンスづくりのために、人々が木を切ってしまったのでまはだかになっている、200メートルも遠くまでかけ出さなければならなかった。

やっとのことでセンターからは見えないところまでたどりつき、青空を見ながら気持ちよくしゃがんでいた。すると、どこかでたき木をとってきた帰りらしい、一群の女性が、急に現われた。ここでちょっとわき道にそれるが、ソマリアをはじめアフリカの多くの国々では、水汲みやたき木とりなどの重労働は、女性の仕事であり、男はたとえすることがなくても、これを手伝うことはない。難民キャンプでは、家畜をもたない元遊牧民の男たちは、政治談議と称しては、日がなお茶を飲み、することもなく話しているのである。閑話休題。

背に重いたき木をしょって、前かがみになって歩いてきた女性たちは、目の前に急にあらわれた、ズボンをおろした外国人を見てびっくりしたことだろう。しかし驚いたのはこっちも同じで、かといってすぐにズボンをひき上げるわけにもいかない。にこっと笑って「ナバノ（こんにちわ）」とあいさつをした。すると女性たちも、あさ黒い顔にまっ白な歯をみせて、「ナバノ」とあいさつを返してくれたのであった。



「ナバノ」

JVCプロジェクト

1987年7月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	<p>涉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。</p> <p>機関誌「トライアル・アンド・エラー」発行。</p> <p>JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3土曜日 午後1時～4時 学習会 月1回 午後6時～9時 (希望者にはハガキにて連絡)</p>	全国社会福祉協議会	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 佐々木志保, 林 達雄, 前川昌代, 鶴田三芳, 古西 勇, 富安光子, 岩崎美佐子, アイネス・バスカビル
神奈川県 (JVC 神奈川)	<p>神奈川県内における涉外, 事業計画, 情報収集, 資金調達等を行う。</p> <p>神奈川県及び県内の市民団体との共同事業の企画, 運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション</p> <p>JVC説明会—毎月第1火曜日 午後6時～9時 毎月第2土曜日 午後1時～4時</p>		山口誠史
日本国内	<p>●定住難民プロジェクト</p> <p>神奈川オフィス(7月5日)と東京オフィス(7月6日)において, 新規ボランティア希望の人たちに対するオリエンテーションを行った。当日, 神奈川には10人, 東京には3人の参加者があった。現在活動中のボランティアも加わり, プロジェクトの趣旨について説明した。これらの人々に対しては, ボランティアを希望している定住者との組み合わせを行っていく。</p> <p>7月20日『もしもしあね』第2号を発行した。</p>	<p>ジャパン・タイムズ 神奈川県福祉部 横浜キワニスクラブ, 全国老人クラブ 連合会</p>	山口誠史, 他約60人
	<p>●東金農場</p> <p>68aの水田の草取りが終わり, どの水田もそろって穂を出しはじめた。</p> <p>畑も草取りに追われる毎日。現在収穫中の野菜はインゲン豆, ナス, キュウリ等。トウモロコシの収穫も近い。</p> <p>7月17～21日, 日米高校生交流プログラムを開き, アメリカと東金の高校生がいっしょに農作業をした。</p>		井本勝幸, 五十嵐裕昌, 松岡美奈子, 飯塚美奈
エチオピア (ウォロ州)	<p>●総合的復興促進</p> <ol style="list-style-type: none"> 種子銀行 耕作用の牛を持たない農民に分割払いによる役牛の販売を開始した。また大雨季(6月末～9月)を前に, 大麦, 小麦の種子の貸しつけを行った。 植林 生産した22万本の苗木を7月中に植えつける予定だったが, いまだに大雨季の降雨がなく, 実施されていない。 モデル農場 アグロフォレストリー用の樹種の育成, 有機農業, 牧草実験等を継続して行っている。現地小学校の環境教育クラスを受け持ち, 授業を始めている。 保健・栄養 母子教室, 家庭菜園の奨励を訪問形式で行っている。農業省による短期婦人家庭教室の一部を担当した。 井戸, 給水 マーシャ村に深井戸を2基掘った後, 水場の汚染を防ぐための水場の保護を開始した。 チェック・ダム(砂防ダム)建設 V字谷浸食防止のための石積み作りを普及中。 	<p>CRDA, 西本願寺, チャリティ・カレンダー, チャリティ・サイクル, メリノール修道士会, 全国老人クラブ連合会, バンド・エイド, 日本漫画家協会, 東京グリーン・ウォーク ジャパン・タイムス</p>	内山田 康, 伊藤達男, 伊藤幸子, 有本敦子, 加納 妙, 山田 盛, イエットベルク, ソロモン, パレタ, フェテルワルク, ダニエル

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡)	<p>干ばつが一転して大洪水になった。荒野は急速に緑を増している。干ばつの被災民に対して行われている緊急食糧配給はもうすぐ終了すると思われる。</p> <p>●農業による自立促進 洪水の悪影響はJVC農場にも及んだ。低い農地では水深2m以上にもなり、その一部は今も冠水したままである。作付面積の約8割が水害で枯れてしまった。しかしこの洪水は土壌表面に埋まった塩分を洗い流し、栄養分を豊富に含む粘土質の土壌を運ぶ役目もした。 農民とJVCスタッフが協力し、農場の壊れた部分の改修に励んでいる。また水の引いた部分から種まきも始めた。</p> <p>●コミュニティー・サービス/収入プロジェクト 燃焼効率の良いセラミック・ストーブ(七輪)の普及とパン屋、かじ屋、帽子屋への資金融資を始めた。いずれも少しの資金で効果的な協力ができる。</p>	UNHCR, 創価学会文化・ 平和運動事務局	嶋 紀晶, シアッド, 荻ノ迫善六, 船川秀夫, 中岡哲也, モハメッド, ラシッド, ハジ, アオキ, アブディ ・ジョフ, フセイン, ア ハメッド, ハッサン
ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)	<p>●医療・保健/補助給食 SRCS(サウジアラビアの団体)への引き継ぎを6月18日完了した。病院設備も引き渡し、その建設費として約1万5000米ドルをSRCSから返却してもらった。</p> <p>●教育 小学校の建築にかかっていたが、これもSRCSに引き継いでもらった。</p> <p>●植林/家庭菜園/収入プロジェクト これらについては現在も継続している。その必要性はもとより、難民、地元民、ソマリア政府部局から、今後も続けてほしいとの要望が強い。しかし活動資金が不足している。</p>	朝日新聞厚生文 化事業団, 砂漠に種をまく 人の会	浜野敏子, 米澤 聡, 庄司 美, シュクリ, ハッサン, アブディ, シュイク・アブディ
カンブチア (プノンベン カンダール省 プレイベン省 スバイリエン省)	<p>●カンブチアの人々への総合的人道援助 今年も全体として雨の到来が遅れ、各地の雨量もとても少ない。天候の不順が稲作に与える影響は深刻のようだ。耕作地のうち3%しか田植を終了していないという公式発表がなされている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. サンタピエップ(平和)技術学校・ワークショップ かねてより建設が進められていた校舎・修理工場が完成し、7月15日同校で落成式が行われた。JVCの岩崎代表ら7人の代表団が日本とタイから参加し、プノンベン駐在の西側NGO(民間団体)代表らも出席した。車やかんがいポンプなどの修理技術を孤児や未亡人などに訓練しながら修理する施設である。援助活動の最も基本的で重要な輸送機関でありながら、79年以後、故障したまま放置されていた数百台のトラックもようやく修理される目途がついた。 2. 井戸掘り/給水(OXFAMと共同) プレイベン省、スバイリエン省で続行中。 3. ブラック・ピノウ孤児院援助 トンレサップ川からの水浄化システムを計画中。 4. 補助栄養給食 カンダール、スバイリエン、コンボンスプー、コンボンチナンなど各省の母子保健の実情を調査中。 	全国老人クラブ 連合会, 創価学会文化平 和運動事務局, モラロジーMIRC, 立正佼成会, 自動車労連, 庭野平和財団, ILCチャリティ グループ, 西本願寺, 善興寺ダーナ基 金, 高岡青年僧侶会	熊岡路矢, 簗田健一, 簗田玲子, 馬 清, マリー・キャマル

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ バンコク事務所	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報, バザー, 古本のセール。 季刊「ニュース・レター」(英語・タイ語)発行。	全国社会福祉協議会	ボンピモン・チャイブーン, 柴田久史, カモン・ミンムアン, スンニー・テイチャリヤクン
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 これまでは理論と実技の2コースに分かれて授業が行われていたが, これを廃止した。新しいカリキュラムのもと今年度第3期の授業を24日に開始した。前半期は総計555人の卒業生を出した。これは当初の目標数の110%になる。	UNHCR R.I. ジャパン	矢野和貴, 谷山博史, ソムヨット・ラタナタム, バイトゥーン・チマチュイ
国境のサイト2, ノンチャン (カンブチア 難民村)	●補助給食 主に妊産婦, 乳幼児を対象に栄養教育。ドライパックスの支給が行われた。 6月27日には妊産婦の審査と登録が行われた。 5月下旬に砲撃があつて以来, 今月は際立った動きはなかったが, 警戒は必要である。	WFP/UNBRO	テリース, ブーム, チャンチャイ, トンバイ, スピチャ, 北代り, ソムサック, カレン, エツ, 前野博美 アドレアン
パナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●日本語学校 日本定住予定の34人のクメール生徒が4クラス(中級3クラス, 初級1クラス)に分かれ, 日本語を学習している。文盲の生徒にクメール語の読み書きを教えるクラスが新たに設けられた。 ●科学クラス 7月から新しいサイクルが始った。SCF(セーブ・ザ・チルドレン)の小学校に通う600人以上の子供がJVCの運営のもと, 自然科学の基礎を学んでいる。	天理教千葉	石原淑子, 落合正幸, フォード・順子, アナン・ブダミリンブラ ティープ, ウィパ・ロンブリック
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 本年度の報告書作成が終り, 発送作業を行っている。新しい子供のインタビューをモナリザ, タッケオ, ワットヤイのスラムで行っている。 ●クロントイ図書館 NHA(住宅公社)から許可もあり, 工事は順調に行っている。 ●移動図書 タックロイを訪問し, 現状調査を行った。バンコク市内では本の入れ替え, 巡回指導を随時行っている。 ●移動学習センター(プラティープ財団, FFSC, JSRCとの共同プロジェクト) 9のスラムで学習の機会のない子供たちのため人形劇などで教育, また母親グループの育成を行っている。	モラロジーMIRC, JOFIC, 庭野平和財団, 京都国際青年委員会	ヴァラナート・チェンクン, サムルアイ・ジョンヨーク ラン, アルニー・スニ ットムンヴァイ, リーラ ・クンナロン, スワン・ リンサムパン, コメン・ スンサマラヤ, 柴田久寿子
	●井戸修理プログラム JVCが1982年から4年間に東北タイで掘った80本の井戸を清掃し, 修理を行うため, 夏休みを利用して参加した学生の第一陣が出発した。		カモン・ミンムアン, 赤坂泰央, 高田利恵, 渋沢文生, 伊藤文影
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (PFAC, パラワン島)	●国際移民委員会(ICM)一第三国定住手続きにともなう医療業務及びキャンプ内でのプライマリ・ヘルスケア。	城西病院	石井弘代

JVCの活動とその目的に御理解を

▶**JVCとは**—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶**JVCの会員募集について**—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶**機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶**送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC 会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC 東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金が支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. **アフリカ難民救援募金** (7月小計 87,000円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. **グリーン・フォー・アフリカ募金** (7月小計 21,100円) アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. **インドシナ難民救援募金** (7月小計 6,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. **カンブチア募金** (7月小計 235,000円) カンブチア国内の復興のために使われます。
- E. **スラム募金** (7月小計 75,800円) バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
- F. **デッグ・スラム奨学金・基金** (7月小計 315,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. **定住難民募金** (7月小計 2,000円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- H. **JVC運営経費募金** (7月小計 5,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- I. **無指定募金** (7月小計 110,070円)

▶**送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- 東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)
- 加入者名—JVC 東京事務所

編集後記

▶1984年ごろまではT/Eの内容もタイの話題が大部分を占めていたが、この2~3年(私が編集を担当してからということだが)タイの記事はめっきり減ってしまった。難民もキャンプもすべての動きが止まり、もはや何事もないかのように錯覚していた。しかしキャンプ人口は、6月末で14万にも及んでいる。これまで100万人以上が第三国に定住した。それにもかかわらずこの数字だ。難民は決して減ってはいない。いらだちとあきらめが入り混じる。日本の定住者にカオイダンに出てきたからお金を送ってほしいと、つい最近その家族から便りがあったという。



昭和62年 8月20日発行 (毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎03(834)2388 FAX:03(835)0519

Telex:7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F (財)神奈川国際交流協会内 ☎045(671)7082

バンコク事務所 JVC THAILAND
29/3 Soi Saengchan, Sukhumvit40,
Rama 4 Road, Bangkok 10110.
☎391-1117

Telex:87032 COMSERV TH

ソマリア事務所 JVC SOMALIA

c/o UNHCR P.O. Box 2925

Mogadishu,

Telex:794 HICOMREF SM

エチオピア JVC ETHIOPIA

事務所 P.O. Box 6941 Addis Ababa

カンブチア JVC KAMPUCHEA

203 Monorom Hotel Phnom Penh

Letter :c/o ICRC, P.O. Box 11-1492

Bangkok.

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

*本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共300円